

編集委員が
行く

美を追求する私たちの商品

——(株)ナリス コスメティック フロンティア

本誌編集委員 ホンダ太陽株式会社 取締役管理本部長 樋口克己



株式会社ナリス コスメティック フロンティア

神戸市東灘区向洋町西5-10-4

TEL 078-846-6616 FAX 078-842-5560

設立=平成17年8月1日

操業=平成18年10月2日

特例子会社認定=平成19年1月9日

従業員数=27名（うちナリス化粧品からの出向者3名）

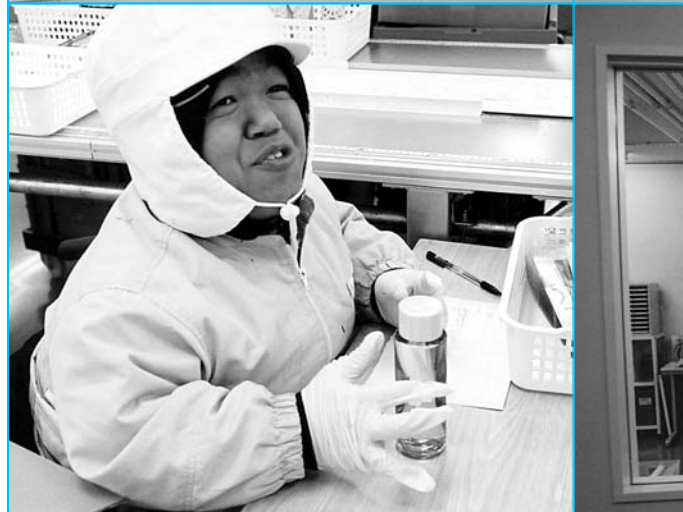
- 全体 27名
- 健全者 15名
- 障害者 12名（聴覚障害4名、下肢障害4名、知的障害3名、内部障害1名）



今回は神戸へやってきました。神戸といえば、平成七年の「阪神・淡路大震災」が思い起こされます。震災後の神戸へ行きましたが、信じられない光景が目の前に広がっていました。亡くなった方も大勢いましたが、あの地震で障害を負った方もかなりの人数に上ったと聞いています。

自然災害はいつ、どこで起こるかの予測が難しく、海外も含めて常に世界のどこかで自然が猛威を振るっている現実を、私たちは心に留め、それに備えたいものです。

その神戸で新しく「特例子会社」を立ち上げ、障害のある人たちが自ら商品開発に携わり、市場に供給している株式会社



社ナリス コスメティック フロンティアを訪ねました。

三代目社長の熱い想い

ナリス化粧品の代表取締役社長は、三代目となる村岡弘義さんである。祖父が設立したナリス化粧品を父から引き継ぎ、現在は健康関連や外食事業も手掛けている。もちろん今回おじやました「ナリス コスメティック フロンティア」の社長も兼任している。お話をうかがうと、素晴らしいお考えと心をお持ちの方だった。以下は筆者との会話の内容である。

——どうして特例子会社をつくらうと思われたのですか？



「実は自分の子供が障害を持って生まれてきたことが一つです。それに、障害者の親という立場で講演を聴きに行き、



ナリス化粧品、村岡弘義社長



品質管理を担当する沖賢治さん

特例子会社ということを考えました。社会に企業として存在する中で、障害のある人たちもいるのが自然です。企業は効率・利益だけではない。それ以外の価値観を持つことの大切さを、自分の子や講演を通して教えてもらいました」

自らの周りに障害のある人がいたことが、村岡社長の人に対する考え方・価値観を大きく変えたことは事実であろう。

「創業者である祖父は、人は何を大切にすべきか? を探求した人です。私が社長になって、その教えを時代の変化とともに形に表したかったです」

——最近ではCSR（企業の社会貢献）が重要視されていますが、その観点からいかがですか?

「当社の障害者雇用は以前から法定雇用率はクリアしていましたが、法律の問

題ではなく利益を追求する中で、目立たないかもしれないですが、確実にそこには障害のある人たちもいることを社員全員が実感することが大切です」

「障害者雇用について古い社員の方たちにも相談したのですが、ぜひやりましょう! と声が上がりました。いろいろ聞くと社員の中にも、障害のある人が周りにいる人もいました。それが当たり前の社会だと改めて感じ、勇気づけられました」

——障害のある社員の方に何を期待し、どうあって欲しいですか?

「したたかに生きて欲しいですね。私や健常者にできる仕事は、障害のある人たちにもやってもらいたい、稼いで欲しいですよ」

「ナリス化粧品は、訪問販売・流通が主力の会社です。実は販売数は横ばいの状況ですが、その中であって生産工場である特例子会社をつくりました。訪問販売以外の分野への取り組みも始めました。彼らにも自分たちはできるといふことを証明してもらいたいのです。工場の稼働率も現在は本社工場に比べて八〇%ぐらいの出来ですが、上を目指してチャレンジしてもらいたい」

——訪問販売ではお客さんの障害に対する考え方もさまざまだと思いますが?

「このナリス化粧品の取り組みを、さらには基本理念である、For o t h

ers（人様のために）を理解・支援いただいているお客様が大勢いらっしゃいます。化粧品は医・食の次にくるものと考えていますが、お客様のニーズ、声に耳を傾け、時代の要求に応える会社として企業の価値観を求めていきたいと思えます」

たまたま、障害のある子供さんがいたことが村岡社長の方向性を決めた一因であると思う。しかし、その根本にはオーナーとしての血が、先代より受け継がれてきていると感じた。

ライン作業の現場にて

●品質管理室

品質管理の全領域を担当する沖賢治さん。彼も先の震災で障害を負った一人である。会社で生産する全商品の検査を行う。親会社で研修を受け、この会社の立ち上げ時から重要な部署を担当している。車いすを使用しているが、検査室も自分で工夫して使いやすいように改良している。過去に不良品を出したこともあった。

「自社内で不良品は絶対止める。その見極め力をさらにつけていきたいです」

品質管理は企業の最後の「砦」である。通常はラインでニラミを効かせているそうだ。厳しい目がお客様の信頼を得ている。



外観検査と梱包作業をする大脇啓嗣さん（右）と羽溪裕さん



明るい性格の山下和仁さん。
次回のアビリンピックを目指している

●包装ライン

商品の外観検査や梱包を行うこのラインでは、車いすの社員が活躍していた。その一人、大脇啓嗣さん。商品の外観検査と新しいパッケージへの梱包を行っていた。

「お客様が買った時にパッケージにキズがあったら大変です。しっかり診てます！」

その対面では山下和仁さんが作業を行っている。

「自分の出番はココヤ！ といつでも待っています」

聞くとところによると「宴会部長」だそう。その宴会部長、実は前回の兵庫県アビリンピック（障害者技能競技大会）

のワードプロセッサ部門で銅メダルを取ったそう。やるね。その明るさで皆を引っ張って行って下さい。

●プレス工程

ここは粉状のパウダーを「プレス」と呼ばれる機械で圧縮させ、容器に詰める作業を行っている。この担当は聴覚障害のある平家祐佳さんと、同じく先輩の増田真理子さんの女性二人組。現場作業標準書に基づき行う作業は確実性がある。自工程の保証を徹底し、完成品検査を行う。作業中にもかかわらず平家さんに筆談で聞いたところ、「毎日使うもの、作る工程が分かって楽しいですよ」

ベテランですか、新人ですか？ と聞くと、にっこり笑って「新人です」と答えた。創立以来の社員で一年半になる。



パウダーを容器に詰める作業をする平家祐佳さんと増田真理子さん（右）。共に聴覚障害者だ

● 仕上工程

ここは六人編成で行う最終ラインである。筆者が訪れた時は、たまたま立ち作業のできる人たちで行っていたが、いろんな障害のある人でもできるように工夫されている。ベルトコンベア式の流れ作業であるが、一人ひとりが自分の作業に責任をもって、自信をもって行っている。



仕上げ工程では、東條隆正さんたち知的障害者が活躍している

不良品がここを通過してしまうと、そのまま「市場クレーム」となってしまう。見落としは許されない。

生産技術を担当する西山さんは、「ベースはつくりませんが、後は彼らがそれを拡大していきます。作業標準書も彼らに合ったように変えていきます」という。治工具の改良も、彼らの作業性を見たうえで、現在では「段取り時間のロス」を減らすためのチャレンジを行っている。

工場長はびんを見つめるか？

ナリスコスメティック フロンティアの取締役工場長、弥久末博文さんは昨年十月に着任した。それ以前はナリス本社で開発・ユーザーサービス等を担当していた。

「本社ではできて当たり前、ここはできなくて当たり前。だからこそできた時の喜びを感じます」と話す。

着任前は障害者・健常者の「差」が大きいと思っていたそうだが、実際は差がない。「こんなこともできるんや！」と思ったそうだ。できないだろうと思ってきたのだが、意に反する嬉しい誤算となった。一五年前には本社工場長も経験したが、ここは素晴らしいところだと痛感している。

「まだ二七人、一人ひとりをつかみきっていません。ただ、会社は人間関係が



弥久末博文(やくすえ・ひろふみ)工場長



編集委員の素顔 樋口克巳

震災以来久し振りに神戸へ行きました。あの悲惨な状況から、今日の復興・発展した神戸の街を見て人間の力のすごさに改めて感動しました。一人ひとり弱い存在かもしれませんが、その力が結集した時のパワーは何にも負けないものになると痛感しました。



「手のひらに聴く」をテーマに開発した商品「ヒアパーム」

このナリスコスメティック フロント

障害のある人と 一緒に開発した商品 「ヒアパーム」の「マーシャル」

重要です。私や健常者は足りなかったり、やりすぎたりすることがあります。ここは、障害のある人たちが中心となって現場と間接部門の橋渡しをやってくれるので人間関係がスムーズにいつています。後は本社工場と比較して八〇%の出来とされる、残りの二〇%をどうやって埋めるかを彼らと一緒に考えて、やっていきたいと思っています。まずは段取り時間の短縮と後片付け、5Sの徹底から始めます」

イアの開発商品に「HEAR PALM」(ヒア パーム)という商品があるが、これは障害のある人の「感覚」から生まれた商品である。その意味は「手のひらに聴く」である。化粧品としての新しいパフォーマンスを發揮した商品ではないだろうか？

筆者は化粧品のことには全く素人だが、この「手のひらで感じる」とも訳せる商品は、ジェル状の化粧水がサラサラになるそうだ。サンプルをいただき、当社に持ち帰り女性社員に試してもらったのだが、なかなか評判が良かった。一般の消費者の中には「障害者が作ったものが大丈夫か？」という声があるのも事実である。その概念を一掃するものになるかもしれないと思うと、なんだかワクワクするような商品である。

志を形に

弥久末工場長は、「本社(親会社)との交流を積極的に進めたい。そして必ず本社工場を追い抜く！」と語ってくれた。その意気込みで全従業員と共に、具現化してもらいたい。最後に村岡社長の言葉で終わりたい。

「いろんなことを学び、教わってききましたが、ナリスコスメティック フロントイアはそれを実行する場です」
その通りだと筆者も共感する。福祉や



障害者雇用などを取り上げると、反対する人はほとんどいない。総論は全員賛成だ。しかし、具体的な各論に入ると、なかなか前進しないのも事実。志を机上の空論で終わらせるのではなく、それを「形」として具現化できた時こそ、真のユニバーサル社会の実現となると思う。

事務担当として活躍する
寺地淳さん